

「メデイリック第3回」WORKshop

「ソフトクリーム」

登場人物

白木 シロスコフ

吉野 テオ・ポー

高柳 ペイリー・チャイルド

※白木、吉野、板付き

【L・明転】

白木 「こんにちはー」

※高柳、登場

高柳 「あー、どうもどうも」

白木 「お電話させて頂きました、(株)アイスパ
ラネットの白木です」

吉野 「吉野と申します」

高柳 「はいはい。お掛けになってください」

白木 「失礼いたします」

高柳 「夏のシーズンは過ぎただけけど、うち
のお店でも新しくソフトクリームを始め
ようと思ってる」

白木 「もう是非！」

高柳 「結構うちの焼き鳥、タレ濃いから、食
後のシメにね」

白木 「我が社の機械を導入して頂ければ、間
違いない、と言わせて頂きます！」

高柳 「あ、そう？美味しい？」

白木 「勿論です！」

高柳 「あなたも？」

吉野 「はい！この世で：2番目に我が社のソ
フトクリームが大好きです！」

高柳 「2番じゃダメじゃん！」

吉野 「1番って言うとりアリティが無いかな
ー？って思ってる！」

高柳 「ははは。いいね！素直！逆に信用でき
るよ！」

【SE・バイブ】

高柳 「あ、ちよつとすいません。(電話に出
て) はいはいー？」

※高柳、はける

間

吉野 「1番は課長ですよっ」

白木 「(嬉しそうに) 馬鹿、ここでは良いん
だよ」

吉野 「ふふ。んー(指で身体をなぞる)」
「やめて」

吉野 「んーん（指で身体をなぞる）」
 白木 「どうしたの？」
 吉野 「だって二人になったの久しぶりだから」
 白木 「仕事中でしょ？」
 吉野 「仕事中でも嬉しいんですー！ふふ」
 白木 「今は、ほら、後でな」
 吉野 「ねーまた旅行行きたい」
 白木 「旅行ね」
 吉野 「今度は海外とか」
 白木 「海外は厳しいよ」
 吉野 「じゃあ…また箱根でもいいし、別のところでもいいし」
 白木 「うん。時間ある時に」
 吉野 「二人で出張とかにならないかなあ？北海道の牧場にソフトの視察でーとか」
 白木 「どうだろうね」
 吉野 「昼は牧場のソフトを食べて、夜はあなたのソフトを…パクッて」
 白木 「やめなさい（笑）」
 吉野 「パクッじゃない方がいい？ねっとり舐めて欲しい？」
 白木 「こら」

吉野 「ねえ部長に言おうよ。二人で行きま
 すって」
 白木 「厳しいんじゃない？」
 吉野 「えー、二人でどっか行きたいー」
 白木 「まあ、そうだね、二人目がもうすぐ生まれるから、もう少ししてからだね」
 吉野 少し寂し気な表情を見せる吉野
 白木 「んー（身体をなぞる）」
 吉野 「こら」
 白木 「んーんー（身体をなぞる）」
 吉野 「こら。戻ってくるよ」
 白木 「んーんー（身体をなぞる）」
 吉野 「いい加減にしろ！仕事中だぞ！」
 白木 「…ごめん。二人きりなの久しぶりだから嬉しくて…」
 白木 「契約取らなきや。ちゃんと集中」
 吉野 「あなたは嬉しくないの？」
 白木 「今は仕事中だから」
 吉野 「最近会ってくれないじゃん。会社でも我慢しなきゃいけないし、いいじゃん。こういう時に少しくらい甘えたって」
 白木 「もうすぐ二人目生まれるの知ってるでしょ？今はそんなに時間割けないよ」

吉野 「別に毎日会ってって言うてるわけじゃないじゃん」

白木 「正直、LINEとかも今は控えて欲しい。嫁も出産前で大分ヒステリックになつてたりするから、あんまり変な時間に連絡来ると怪しまれる」

吉野 「…大丈夫？疲れてる？」

白木 「大丈夫、大丈夫」

吉野 「ほんと？心配。別れちゃいなよ」

白木 「え」

吉野 「うん、別れて私と一緒に暮らそ？毎日、一緒にいよう」

白木 「いや…」

吉野 「私を抱いてる時「愛してる」って言うてくれたじゃん。もう奥さんのこと愛してないんだよ。ね、だから一緒に暮らそ？」

白木 「いやいや、そんな、ね」

吉野 「奥さんに無いものを私が持つてるから興奮できるんですよ？だから、奥さんよりも私の方が好きなんだよ。うん。言いづらいなら私が直接言おうか？」

白木 「やめろ！」

間

白木 「…あのさ、申し訳ないけど、そういうのじゃないから。確かにこうやって君と浮気してるけど、毎日、嫁の所に帰りたいし、二人目できるの心から嬉しいし、ありがたいし、俺は嫁のことを世界で一番愛してるから！」

暗い表情を見せる吉野

※高柳、登場

高柳 「いやーすいません。お待たせしました」

白木 「いえいえ」

高柳 「早速なんだけど、色々不安なところもあって」

白木 「是非、ご相談頂ければ」

高柳 「機械を厨房に置いたら、周りが冷えたんじゃない？焼き物が冷めたら困るからさ」

白木 「影響が出るほど機械が冷えることは無いので、商品が冷めることはないです」

吉野 「私はもう冷めました」

高柳 「それなりの金額出すんだけど、実際どれくらいで初期費用回収できるもん？」
白木 「この店舗なら：すぐだと思えます！安い買い物だったと思うはずです」
吉野 「安い女でしたね」
高柳 「作るの簡単かなー？」
白木 「簡単です！」
吉野 「簡単にヤレル女くらいに思ってた？」
高柳 「綺麗に巻いて立たせるの難しそうだなあ」
白木 「コツさえつかめば」
吉野 「綺麗にチンコ勃ってたね。奥さん愛してるのにね」
高柳 「結構甘い？」
白木 「丁度いい甘さです！」
吉野 「甘い関係は最初だけ」
高柳 「まあ、ソフトクリームなら間違いなく喜ぶよなあ」
白木 「メニューにあれば嬉しい大人も多いはずです！」
吉野 「私もあなたのソフトクリーム大好き」
高柳 「バナラと…」
白木 「チョコと…」
吉野 「あなたのはチョコ色だった」

高柳 「2種類？」
白木 「あと、ストロベリーですね！」
吉野 「私を舐めて「イチゴの味する」って言うてくれた」
高柳 「ミックスとかできないの？」
白木 「1ランク上の機械なら」
吉野 「ミックスできたのは身体だけ」
高柳 「すぐ溶けちゃうんじゃないの？」
白木 「環境によりますねー」
吉野 「このまま溶けてなくなりたい」
高柳 「コーンかカップ？」
白木 「はい」
吉野 「あなたのコーンになりたかった」
高柳 「身体冷えるから、寒い時期は難しいかな？」
白木 「そんなことは。着こんでるせいで逆に暑くなる時もありますからね」
吉野 「寒い：寂しくて寒い」
高柳 「ミニストップより美味しいのー？」
白木 「美味しいです！」
吉野 「このまま地獄にノンストップ」
高柳 「クレミアとか流行ってるよね？少し高くて、コーンがクッキーになってるやつ」

白木 「クレミアにも負けてません！」
吉野 「愛をクレミア」
高柳 「んー……どうしようかなー」
白木 「是非！」
吉野 「どうしようかなー。奥さんに言っちゃおうかなー」
高柳 「んー……ちなみに、その関係はいつ頃から？」
白木 「去年の夏ごろからです」
吉野 「一つのソフトクリームを分け合って食べたよね」
高柳C 「さつきね、ずーっと見てたの」
高柳 「きっかけは？」
白木 「飲み会の帰りにそういう雰囲気になって」
吉野 「仕事への熱心な姿勢に私の心は溶けていた」
高柳 「その日のうちに？」
白木 「はい……」
吉野 「初めてあなたとミックスした」
高柳 「普通は1回で終わったりするじゃん」
白木 「そうですかね……」
吉野 「ミックスの相性が最高って喜んでくれた」

高柳 「「付き合おう」とか言っちゃったんじゃないの？」
白木 「……言った時もあります」
吉野 「あなたのコーンになりたかった」
高柳 「「別れる」とか約束しちゃったんじゃないの？」
白木 「そのつもりだったんですけど……嫁が二人目を妊娠してるのがわかって」
吉野 「ミックススレスって嘘だったんだね」
高柳 「でも関係はダラダラと？」
白木 「ダラダラ続けちゃって……」
吉野 「ダラダラ流れるあなたの精子」
高柳 「何やってんの……」
白木 「自分でも……最低だって思ってます……」
吉野 「私の心には穴が開いてるから。穴だらけの私にあなたは身を預けてくれなかった。コーンとしては不良品。ベタベタしてごめんね。迷惑だったね。もういいの。私は捨てられて、避けられて、このまま溶けてなくなるの……真夏の遊園地で子供が落としたソフトクリームのように……」

間

高柳 「…よし！わかりました。契約します」

白木 「え、よろしいんですか？」

高柳 C 「だって…可哀そうだもん。見てらんないよ」

高柳 「大丈夫」

白木 「ありがとうございます」

吉野、資料を出して

吉野 「…これにハンコ、クレミア」

【L・暗転】

—了—